

(3) アスパラガス

ア 品目の概要

(ア) 生理・生態

アスパラガスは多年生作物で、地下部の貯蔵根に養分を貯蔵し、翌春の萌芽時に利用する特性をもつ。長野県の冷涼な気候下では萌芽は地温の影響を強く受ける。地上部の茎葉は光合成によってデンプンを生成し、葉が十分に展開して光合成がされると翌年の芽数や茎径が安定する。そのため、貯蔵根の養分蓄積状態が翌年の収量を決める。葉が重なりやすく、通風・光条件が悪くなると病害の発生を助長するため、株内部まで光が届くような茎数管理が重要となる。

(イ) 栽培のポイント

1年養成株の定植は、遅霜の心配がなくなる時期が適しており、5月中旬～6月上旬が目安となる。定植後、1か月程度で萌芽してくる。定植1年目は若茎の収穫は行わず、株養成を最優先とする。定植1年目は極細の茎を整理し、フラワーネット等を用いて茎葉の倒伏防止を行うとともに、できるだけ太い茎を立てて株養成を促す。地際から50cmまでの下枝は順次かき取り、株元への採光と通風を確保する。乾燥防止のため通路に敷きわらを施し、滞水させないようにうね間かん水を適切に行う。

定植2年目は、前年の生育が良好であれば春に1週間程度収穫を行った後、茎枯病等の病害防除のため株元に殺菌剤を散布する。その後、フラワーネット等を用いて、茎径10mm程度の太さの茎を1㎡あたり18～20本程度立茎させ、秋にかけて収穫する。茎葉等の管理、病虫害防除は定植1年目と同様とする。

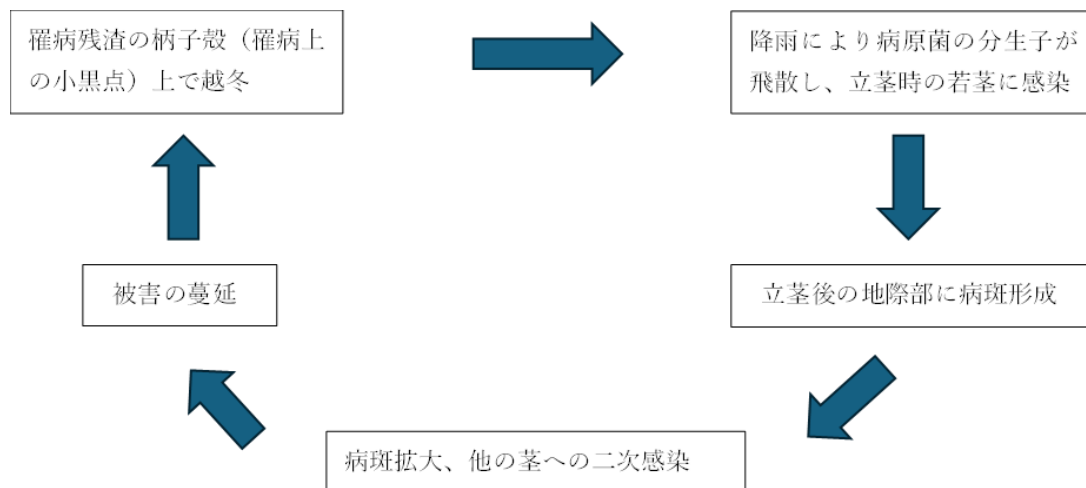
定植3年目の春どりの収穫期間の目安は15～20日間とし、若茎頭部の開き、細茎、曲がり茎などの発生が増えてきたら収穫期間を短くする。定植4年目以降の収穫期間は、株の状態や規格外品の発生程度により調整する。

セル苗定植した場合も1年養成株同様、定植1年目は若茎の収穫は行わず株養成を最優先とする。管理方法は前述の1年養成株と同じとする。

(ウ) 病虫害防除

病虫害防除は、初発を見逃さないように初期防除に努める。秋に茎葉が黄化したら株元から刈り取り、株元を火炎バーナーで焼却し病原菌密度を低減する。

地上部の主な病害は茎枯病、斑点病、立枯病などがあり、多湿条件で発生しやすい。特に茎枯病（病原菌名：*Diaporthe asparagi*）は、発病すると株自体が枯死し、翌春の春どり収量に大きな影響が出るため、注意する。防除方法として、雨よけ栽培、罹病残渣のほ場外への持出し、立茎後の防除を組み合わせで行う。主な害虫はジュウシホシクビナガハムシ、オオタバコガの他アザミウマ類やハダニ類である。



茎枯病の伝染様式（“長野県野菜栽培指標（令和3年3月改訂）”より）

長野県公式ホームページでは、アスパラガスの栽培技術マニュアル、茎枯病対策、管理作業の動画等を公開している。（右記二次元コード参照）



長野県HP

イ 取組事例「令和6年度アスパラガス現地検討会」

（ア）検討の結果

令和6年、原村で、ブロッコリーに代わる収益性の高い品目としてアスパラガス導入に関する検討会を開催した。標高が高い原村において導入のメリットを見いだせるかについて、専門技術員を交え、JA営農指導員や生産者で行った意見交換である。得られた意見を以下に示す。



現地検討会の様子

<アスパラガス導入のメリット>

- ・地元直売出荷では高単価で売れ行きがよい。
- ・ブロッコリー出荷までの春先のつなぎ品目として有望。
- ・長期間の転作となるため畑を複数年休ませることができる。
- ・冷涼な気候を活かし、初夏の高単価の時期に上位等級をねらって出荷ができる。

<アスパラガス導入のデメリット>

- ・湿害を生じやすいので、排水性の良いほ場選択や排水対策が必要である。
- ・通常栽培では10年以上栽培が続くため、輪作には不向きである。
- ・作業労力的に、品目転換しなければ経営は難しい。
- ・茎枯病対策のため、雨よけ施設の初期投資費用がかかる。